



札幌市医師会市民対話集会2008 佐藤のりゆきの「医療費は削減！自己負担は 増大！国にお金がないからって言うけれ ど...？そのカラクリについて考えよう」

政策部長 鈴木伸和

今やすっかり恒例となった札幌市医師会市民対話集会ですが、今年は8月9日（土）午後1時半からおよそ2時間に渡って札幌市医師会館5階大ホールで開催しました。司会はこれまた恒例となった感のあるテレビでおなじみの佐藤のりゆきキャスターで、上述のようなテーマでパネルディスカッションを繰り広げました。

集まった市民はおよそ200名。夏季オリンピック競技や甲子園大会の本道代表チームの試合時間と重なったためか事前の応募人数よりは少なくなりましたが、それでもこれだけ多くの方がご来場くださり、市民の医療負担に関する関心の高さを伺い知ることができました。

さて、会は河西紀夫副会長の開会の挨拶で始まりました。続いて私達札幌市医師会の会員が参加したテレビ番組「のりゆきのトークDE北海道 3月20日春分の日スペシャル企画『激論！医師&看護師 北海道医療崩壊の現場』」のVTRを5分間ほど会場で放映し、その後にパネリストが順に登壇してパネルディスカッションを始めました。パネリストは日医総研の前田由美子さん、北海道新聞記者の荻野貴生さんに私を交えた3人です。

まずは後期高齢者医療制度の問題から取り上げてゆきました。

口火を切られたのは新聞記者の荻野さんです。厚労省はたいていの世帯は負担減になると発表したものの、その影で低所得者層で保険料



の負担増が起きているということ、読者からはそれによって受診を控えるようになったという声が寄せられたという話を紹介していただきました。

やはり後期高齢者医療制度というのは高齢者を切り捨てる制度だったのかという質問が佐藤キャスターから私に投げかけられて、医師として75歳以上だからという理由で医療差別を行うことはないかと約束するとともに、後期高齢者の負担を現行制度よりも軽減させる日本医師会の案を説明させていただきました。その日医案の内容はおおよそ次のようなものです。現状は後期高齢者の負担が保険料・窓口負担を合わせて医療費全体の2割近くになっていますが、これを1割に抑えて、残りはすべて公費で賄うというもので、この案では今後少子高齢化が進んだとしても少なくとも2015年までは国に特別大きな財源を求めなくても十分対応可能であるというものです。

続いて話題はわが国の医療費抑制策に変わりました。

私がまず日本がなぜこれほどまで医療費抑制策を行うようになったかについて説明しました。本来医療費の増大は医学技術の進歩や高齢者人口の増加で自然に起きるものであり、これはわが国特有のものではなくて世界各国に起きているということ。むしろわが国の医療費はOECD加盟国の中では少ないということ。それにもかかわらず、厚労省は「医療費亡国論」を盾にずっと抑制策を続け、患者自己負担増や医学部の定員削減政策、社会保障費の機械的な抑制策を行ってきたことなどをスライドを使って紹介しました。

では現実にわが国にはこれ以上医療費につき込む財源はないのかという話題になり、それについては日医総研の前田さんがデータをもとにきっぱりと否定してくださりました。示されたデータは次のようなものです。まず国の借金の主因はあたかも社会保障費にあるかのように説明するけれども、本当の主因は公共事業や財投のための国債であるということ、国にお金がないというけれども、埋蔵金とも揶揄される特別

会計が2006年度で51兆円の黒字となっており、年金以外の積立金が65兆円もあるということ、医療費における事業主負担は現在のところ20%程度であるが、これを1992年の25%程度まで引き上げることで1.6兆円の財源が出来るということ、そのほか高所得者の保険料上限の緩和や保険料率の統一化（最も高い政管健保に合わせる）でも財源確保は出来るということなどで

最後に佐藤のりゆきキャスターから会場にいられた市民の方々のうちボタンを持っていた100名の皆さんに質問がありました。「今日のこの話を聞くまでは、現在の国の経済状態を考えると今の保険料や窓口負担はしかたがないと考えていた人たちはどれくらいいますか」この問いに「はい」と返答された方は35名。「では、『はい』と押した35名の人たちにもう一度質問します。今日の話を聞いて、もっと医療の負担を軽くしても問題ないと考えを変えた人、スイッチをどうぞ」これに「はい」と返答されたのはほぼ全員の34名。

あっという間の2時間でしたが、とても有意義な市民対話集会でした。



コーディネーター 佐藤のりゆき 氏



日医総研研究部専門部長 前田由美子 氏



札幌市医師会理事 鈴木政策部長



北海道新聞社編集局生活部記者 荻野 貴生 氏